



愛知万博を紹介する大手新聞社系の週刊誌で、「ブルキナ・ファソなど、名前を聞いたこともないような国も含め、…」と記述されていた。これが平均的な日本人の感覚であろう。私自身、この西アフリカの内陸国を初めて認識したのは、米国で農業経済学を学び始めたころからだったから、1990年代の初めのことだ。無理もない。ブルキナ・ファソという国名は1984年に定められたものだ。1960年にフランスから独立した際の国名はオートボルタである。これなら、小学生のころ憶えた世界の国々の中に含まれていた。でも、ブルキナ・ファソという名前が初めて授業で出てきた時、オートボルタのことだとは気づかず、どこにあるのかも見当がつかなかった。ましてや、この国を対象とした研究で博士号を取得するとは、思いもよらないことであった。

2005年の2月から3月にかけて、3週間ほどブルキナ・ファソに出張した。1998年8月に初めてこの国を訪れて以来、13回目の訪問である。ところが実は、1995年8月に博士号を授与されるまで、研究対象の同国には一度も足を踏み入れたことはなかったのである。私はその点を大きな心残りにしたまま、同年10月に当時の農業総合研究所に採用された。そのため、個人的にはブルキナ・ファソに行くことを研究生生活の第一の課題に据えた。以来、JIRCASへの出向期間を含めて10年近くの間、13回の訪問を実現したのだから、目標は十分に達成したといえるだろう。

私がブルキナ・ファソを研究対象としたのは、全くの偶然にすぎない。「データを分析する助手の仕事」に金のない私費留学生在が飛びついただけである。経済的にも大いに助けら

れたが、今から思えば、このデータセットに巡り会えたことが何よりも幸運なことであった。このデータセットは国際半乾燥熱帯作物研究所（ICRISAT）が1980年から85年にかけて、同国の6カ村、150世帯の農家を対象に作成したパネルデータである。有名なインドのICRISATパネルデータは、多くの重要な論文の生産に貢献したが、それと同時期にできた不出来な弟分のようなデータセットだ。

開発経済学では、こうしたパネルデータを使ってミクロ経済学に基づく実証的な研究を行うことが近年とても盛んになっている。いわゆる「開発ミクロ経済学」と呼ばれる分野だ。インドのICRISATパネルデータはその先鞭をつけたが、私はブルキナ・ファソのデータを分析することで、意図せずしてその末端に連なることになった。

しかし、1980年代前半に集められたブルキナ・ファソのデータは、政策立案に貢献するような実証研究をするにはいささか古すぎる。そこで、私が日本で職を得た際に企図したのは、新たなパネルデータを構築することだった。1998年の予備調査以来、内部や外部の資金を様々に工面しながら、8カ村、252世帯を対象とした調査を行ってきた。2003年からは環境省の資金を得て、隣国のコートジボワールの内戦が土壌劣化・砂漠化に及ぼす影響の解明を課題としている。今回の出張は、この研究プロジェクトにかかわるものである。

今年度でこのプロジェクトも終わりとなる。しかし、まだこのデータを使った論文をあまり書いていないことが問題である。これからは論文を量産しなければならない。そうすれば、ブルキナ・ファソの国名ももう少し有名になるのではないかと期待している。



石列と植樹による土壌保全技術。1980年代前半にはほとんど普及していなかった。